

際どうしてか維新に於ける「日本外史」「太平記」などのような讀みものを、國民に与えて奮起させねばならぬ。それには硬いものよりむしろ「太平記」のような小説で、讀者の興味をうち引き入れることが上策であると考へて腹案を練つた。

(この項つづく)

偶感

大内勢の堅田侵攻についての一考察

佐伯史談会

会長 高木嘉吉

嘉吉元年の大内勢の堅田侵攻については、姫岳の合戦の余波として、佐伯史談八十一号に管見を述べて諸賢の批判を仰いだ。なほ大内勢が堅田に侵攻したかについては不明で、想像を記すに止めて残念に思つていた。

ところが先日、加藤会員とある事で佐伯氏の系圖を調べた。そのとき増村隆也氏の佐伯郷土史後編に記載されている佐伯氏の系圖にも目を過した。そして此代惟世の妹が大友持直に嫁していることを見出して、及左と藤をたいた。此の発見で前述の疑問が一応解決した。當時佐伯氏は日田氏田原氏と並んで、豊後に於ける強大な氏族であつたが、姫岳の戦いで持直を支持して、大内勢と戦つたことは間違いないと確信した。

かくて大内教弘の嘉吉元年に於ける九州出兵に當り、教弘は持直必ず佐伯に在らんと考へ、又姫岳の戦で大内勢を悩ました佐伯氏を撃滅せんものと、佐伯氏の本拠であつた堅田侵攻と首つたのであろう。

ここで痛感することは、佐伯氏の系圖は何度も調べて

いるのは、大事なことを見落していた迂さであり、一行の記録が事件解決の端緒と考へる記録の大切さである。心して郷土史探訪の旅を続けようと思ふ次第である。

(おわり)

回想

楠

市野頭 仁

私は学校まで毎朝二十分間、川辺の道を毎日歩いて通つている。埴り、草色の水面から魚が突然反お上つたり、身をたして泳ぐ様を眺めたがして、楽しまながら家路に向かう。

学校と我が家の真中位の所に、大きな楠が一本、亭々と聳えている。楠は道路の真中にある、古と左に疾走する車を、見下して立っている。

ここは昔、十九浦の漁船や渡船が集まる船着場の近くで、住吉神社の境内、そして楠はその神木であつた。

家に近づくにつれて、川は溝のように濁り、臭くて魚は全く見えない。私は悲しいけれど、この道を通る。

私の通る道は、埋め立て場所が多く、太い木の根っ子が、あすこは一つ、ここは一つと、河岸であつた石垣を抱いたまま、無慈悲な姿で枯れ果てている。

いざれも巨木であつた。毛利公の参勤交代の船出を見ていた、数少ない大切な樹々であつた。

それが、今ではただ一本の楠のみとなつてしまつた。

私は朝夕、自然の変遷と人間の歴史について、この楠から聞かされるのである。

1 NHK「くらしのなまより」飛騨原鶴(彦達彦)より